

和歌文学
講座
12

和歌研究史

和歌文学

歌研究史

和歌文学講座
12

和歌文学講座 第12巻

昭和四十五年十二月五日 初版印刷
昭和四十五年十二月十日 初版発行

定価 一八〇〇円

編者 和歌文学会
会長 久松潜一

発行者 及川篤二

印刷所 暁印刷株式会社

101 東京都千代田区猿樂町二ノ八ノ十三

桜 楓 社

TEL(三六) 五六六〇―二
振替東京 一八〇二〇

検印省略

和歌研究史
目次

古代における和歌研究 小沢正夫 七

一 はしがき 七

二 奈良朝末期 八

三 平安朝前期 三

四 平安朝中期 三

五 前期院政期 二六

六 平安朝末期 三六

中世における和歌研究・Ⅰ 藤平春男 四〇

一 藤原定家 四〇

二 為家とその周辺の人々 四六

三 鎌倉初・中期の御子左家以外の人々 六六

中世における和歌研究・Ⅱ 井上宗雄 七三

一 はしがき 七三

二 飛鳥井家 七五

三 冷泉家 七九

四 常光院流 八三

五 宗祇流の歌人・連歌師 八五

六 三条西家 九〇

七 結び 九五

近世における和歌研究 山岸徳平 九

一 革新研究への警鐘 九

二 古学における自由研究の先声 一〇

三 戸田茂睡の反正 一〇

四 春満の意気と真淵の古語研究 一六

近代における和歌研究 久松潜一 二三

一 序説、和歌文学研究の諸方面 二三

二 明治二〇年までの和歌文学研究 二四

三 明治中期の和歌文学研究 二五

四 明治後期の和歌文学研究 二六

『万葉集』の研究史 大久保正 二四

一 万葉研究史の時期区分 二四

二 万葉研究の発生 二四

三 『万葉集』の古点と古点期の研究 二五

四 『万葉集』の次点と次点期の研究 二六

五 仙覚の万葉研究の性格 二七

六 南北朝・室町期の万葉研究 二八

七 近世万葉研究の興隆 二九

八 『万葉代匠記』の成立と方法 二九

九 春満・真淵および真淵門下の研究 二九

一〇	近世万葉研究の分化展開と雅澄の大成……………	二〇三
二	近代万葉研究の出發と『校本万葉集』『万葉集総索引』の完成……………	二〇八
三	昭和期における万葉研究の展開……………	二五
	『古今和歌集』の研究史……………	
	久曾神昇……………	三六
一	成立……………	三六
二	諸本……………	三〇
三	系統論……………	三六
四	両序……………	四二
五	歌集……………	四六
六	注釈……………	五二
七	その他……………	五三
	『新古今和歌集』の研究史……………	
	後藤重郎……………	五五
一	はじめに……………	五五
二	時期区分……………	五五

和歌研究史

古代における和歌研究

一 はしがき

小 沢 正 夫

この小論は和歌の研究ということなるべく広範囲に考え、その発達を系統的に知るために、大体年代的に記述するものである。和歌についての研究意識は、どうすればよい和歌をよめるだろうかという程度のもので含むならば、それは和歌の発生と同時に存在したであろう。事実、最初の和歌研究書である『歌経標式』は、作歌のために歌を種々の観点から検討し分析して、歌人に組織的知識を与えようとしたものである。そして、四〇〇年のちの平安末期に出た六条藤家の清輔・顯昭らの手になったいわゆる「歌学書」によって、古代の和歌研究は集大成されたのである。その間に現われた和歌の研究は、修辭論・音韻論・用語論・風体論を始め、和歌史的考察、歌人論・秀歌論、古歌集の書写・校訂・注釈、歌集の編集などはいうまでもなく、歌会・歌合の儀式・故実や歌人に関する逸話の記述といった方面にまで及んでいる。これらの中には純粹な和歌研究といえないものも含まれているが、なるべく広い範囲のものを取り扱うつもりである。しかし、和歌の批評または歌論というべきものと、『万葉集』と『古今集』との個個の研究史とは本講座には他の研究があるので、ここでは簡単にふれることにする。

次に、和歌研究史の「古代」の部を左のように時期区分しようと思う。

第一期 奈良朝末期 (『万葉集』以後)

第二期 平安朝前期 (『古今集』・『後撰集』)

第三期 平安朝中期 (『拾遺集』)

第四期 前期院政期 (『後拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』)

第五期 平安朝末期 (『統詞花集』・『千載集』)

各時期の下に、その時代の勅撰集またはそれに準ずるものの名前をしるして参考にしたのは、研究史の展開は和歌史の展開と無関係であると思われるからである。ただし、三代集の時代を二つに分けたのは、研究史の上では平安中期が新しい研究の起こった時代として、特筆すべきものをもっていると考えられるからである。

この小論には、新資料の紹介・新見解の提示などは少ないかもしれないが、古代の和歌研究を系統的に跡づけて、幾分かの時代的意義を見出だしていたならば幸いに思うのである。

二 奈良朝末期

奈良朝の末期、宝亀三年(七七二)に藤原浜成によって『歌経標式』が書かれたが、これが和歌についての何等かの意味での研究を目的として書かれた最古の書物である。その後、一〇世紀の中ごろ以後に、書名に「式」という字をもったいくつかの歌学書が現われて現代に伝えられている。これらの書物(以後総称して「和歌式」と呼ぶ)は、歌病とか歌体とかの名目で和歌の形式面を主として論じている点で共通した性格をもっているが、それぞれが成立した時代の文芸意識を反映して、おのおのが当然独自の時代色を帯びている。中でも『歌経標式』の独自性が一番強いこ

とは、この本だけによってすべてを推量することはできないにしても、結局奈良時代の和歌研究が平安時代以後のものといちじるしく違っているということにもなる。

『歌経標式』には「真本」「抄本」と呼ばれる二つの本文系統があるが、前者が原形に近いと一般に考えられているので、ここではすべて真本系統によって論を進めることにする。本書は序文でまず和歌の起源・本質・効用などを説き、続いて近代の歌人は音韻の知識が乏しいが、作歌に際しては音韻が重要であるからこの本を著述するのだといっている。序文の一節を引用すると、

故ニ新例ヲ建テ、則チ韻曲ヲ抄シ、(原漢文、以下も漢文の引用は片仮名書き下しとする)

ということであるから、これをそのまま信用すれば本書以前に類似の書物は存在しなかったことになる。

本文は「歌病略有三七種」とする部分と、「歌体有三」とする部分とに大きく二分され、前者では七種の「歌病」を例歌を上げながら説明し、後者はさらに「求韻」、「査体」、「雑体」の三部に分かれて、それぞれの項の下で「歌体」と称するものを論じている。

「歌病略有三七種」として上げられた歌病の名称をしるすと次の通りである。

一者頭尾 二者胸尾 三者腰尾 四者鬚子 五者遊風 六者同音韻 七者遍身

これらの病やまいと称するものの中で、最初の頭尾病の説明を見ると、歌の第一句と第二句との最後の文字が同じとなつてはいけなないので、「霜枯れの／しだり柳の……」のようなものはこの規則に反したもので頭尾病にかかっているといふのである。他の病の説明も大体この調子であつて、日本の歌の批評規準としてはなほ無理なのである。しかし、中国では詩病といつて詩の音韻上の欠点を早くから論じていて、その説が当時の日本にもはいつて来たので、それにならつて和歌の作法に規制を加えようとしたものが、この歌病説だったのである。歌病の名前を見ても、四番目の鬚えま

子^しというのはほくろのことで規則違反の文字を人体のほくろに例えたもの、七番目の遍身^{へんしん}というのはそのような文字（病氣）が全身（歌のあちこち）に及んでいるという比喻によるもので、何となく中国風の命名法である。五番目の遊風は遊蜂（飛び廻るはち）の意ではないかと思われるが、それならば中国詩学の蜂腰病（五言の詩句の二字目と五字目が同音韻であること）にならった命名法で、中語詩学との関係はいっそう密接である。頭尾・胸尾などの名称も詩歌を人体の一部に例えて論じるところから来たもので、これも本来は中国で行われたものである。しかし、短歌の各句を頭句・胸句・腹句・尾句などと呼ぶことは『万葉集』の中でもみられるから、たとえそれが中国詩から来たものであるにしても、一部の奈良朝歌人の間では早くから歌に適用されていたものであろう（注一）。

『歌経標式』の後半「凡歌体有^二三^一」といって、歌体を三つに分けて論じている。もつとも、本書が何を指して「歌体」と呼んでいるのかはたいそう分かりにくいのであるが、ここで論じられているものは長歌・短歌という意味での歌体のほかに、対句や歌語のような修辭の問題から、字余り・字足らずなどに及んでいる。この部分の最初の「一者求韻」の項では、長歌においては七字の句、すなわち第二・四・六……の句の最終字、短歌においては第三句と第五句との最終字を韻字とするといっているが、これは中国の長詩と絶句の韻字にならおうとしたものである。

「二者查体」の項で述べられている查体（注二）とは、音韻・意味などに欠点のある歌であり、これに反して、「三者雑体」の項で述べられている雑体とは、欠点とはまったく関係のないものである。雑体とは「くさぐさの体」の意味であろう。雑体には十種類あると『歌経標式』ではいっているが、初めの五つと後の五つでは分類の規準がまったく違っている。前者は、

聚蝶……各句の初めに同じ文字を用いた歌。

譚警……なぞや風刺を歌にしたもの。

双本……今の旋頭歌に当たる。

この三つの他に短歌と長歌とが加えられるのである。双本と短歌と長歌とには脚韻が必要であるというのは、中国詩の規則を和歌に適用した結果である。聚蝶・譴警という名称も中国風であるが、その内容も中国の雜体詩を参考にし、日本の古歌の中からこれらに類似するものを取り出して示したのである。

雜体の後半の五つは以上のものでまったく別のものであるが、その名称は次の通りである。

頭古腰新 頭新腰古 頭古腰古 古新意 新意味

これも名前だけでは何も分からないから、最初の「頭古腰新」というものによって具体的に説明しよう。ここでは、短歌の第一、二句を「頭」、第三、四句を「腰」、第五句を「結句」と呼び、

梓弓あづき 引津ひきつの辺へなる 名告藻なのおもが 花の咲くまで 妹いもに会あはぬか

という例歌を上げ、この歌は第一、二句で古事を、第三、四句で新意を表わしているから、「頭古腰新」であるというのである。第一句の「梓弓」はわれわれのいう枕詞であるが、『歌經標式』ではこの種の語によって修飾された慣用的な成句を「古事」と呼び、慣用によらず作者自身の着想による語句を「新意」と呼ぶらしいのである。詩歌のこのような觀察法もやはり中国詩学から学んだのであるが、和歌の用語に新古の区別があること、とりわけ枕詞を、「古」と意識し、新の語と古の語を適当に配分せよといったことなどは、当時における作歌意識の表われとして特に注意すべきものであろう。また、「かにかくに」のような音の重複に比べると、「いものひも（妹）」というのは物の名であるから、音が重なっても差支えないともいっている。「物の名」とは、われわれの用語でいえば、名詞とか自立語とかに相当し、これに対してわれわれのいう助詞は「韻字」と呼ばれている。これらは非常に初歩的な考えではあるが、中世以後に発達する文法意識の最初の芽生えといえるものである。

『歌経標式』の著者は、今時の歌人のために規則を作つてやるのだという一大抱負をもっていたようである。しかし、でき上った本をみると、かれ自身漢詩に対しては多少の知識はあったろうが、歌に対する理解の程度こそあやしいものである。本書に続くいわゆる「和歌式」の著者は、大体そういう傾向の人だったようである。本書に関してここで改めて注意したいのは歌体論として論じられた「聚蝶」と「謹警」である。前者は「み吉野をよしとよく見てよしといひし……」のようなもので、中国詩の頭韻に似ている。後者は、

ねずみの家 米つきふるひ 木を切りて ひき切り出だす 四つといふかそれ

この歌の初句を「あな」二句目を「こ（粉）」三、四句目を「ひ（火）」末句を「し（四）」と解して、「あな恋し」の意味とした一種のなぞである。これらの語戯にもとづく詩を中国では雑詩とか雑体詩とかいうが、日本でも古代歌謡や『万葉集』の中に、中国詩とは無関係に作られたものが少しある。『古今集』の時代になると、離合・杏冠・物名などの遊戯的な和歌として発達するのであるが、そのころになれば中国の雑体詩を意識的に模倣している（注三）。『歌経標式』にとられている二、三の例歌には中国詩の影響はないと考えられるが、本書の著者がこれを歌体の一種として取り上げたところには中国詩学の影響があるとみるべきであらう。その点では、『歌経模式』は平安前期の歌人たちの仕事に対して、先駆的な役割りを多少はつとめたのであった。

注一 『万葉集』ではわれわれが上の句、下の句というものを頭句、尾句（または発句、末句）と呼んでいることもあり、『歌経標式』では各句の最後の字を尾字と呼んでいる。従つて、頭・胸などの語が歌のどの部分を指すかは、当時は一定していなかった（島津忠夫氏『連歌史の研究』第一章参照）。

注二 「査体」という語は明らかでない。小西甚一氏の『文鏡秘府論考』（研究編下二八三ページ）では査（勘）体の誤りではないかとする。

注三 小沢「雑体和歌の起源としての雑体詩」（『日本文学研究』昭和二八年三、四月号）参照。なお、原田芳起氏は「謹警」を

『遊仙窟』にみえる「譏警」の誤りで、漢詩での掛詞・風喩のような言語遊戲であろうといわれる（『宇津保物語新攷』所収「宇津保物語と遊仙窟」）。

三 平安朝前期

『古今集』が編集されるにあたって、その撰者たちのもっていた和歌、特に古歌に対する見解を『古今集』序を主として考察しよう。この序には紀淑望の作と伝えられる真名序と、紀貫之の作と思われる仮名序とがあり、どちらも『古今集』にそえて天皇に奏覧するために書かれた文章の形式をとっている。その文章の一部で、古代から撰者たちの時代までの和歌の歴史を大体次のように述べている（注四）。

和歌は天地の創生の時からあり、最初は素朴なものであつたが、次第に複雑さを加えて隆盛に赴いた。天皇が臣下に歌を奉らせ、その賢愚を知るよすがとしていたころには、和歌が盛んであつたが、人心が華美になると和歌も衰えた。奈良時代には人麻呂・赤人という二大歌人が出て、『万葉集』の編集も行われた。その後、すぐれた歌人の出ない時代があつたが、近代には六歌仙といわれる人たちがまず名を現わし、今では天皇の政治もよいので、和歌は昔の最盛時に立ち返った。

以上の説には問題となる点も多いけれども、とにかく『古今集』序が和歌の歴史の概略を述べた最初のものである。このような和歌史のとりえ方にはいくつかの特色があるが、それを次に上げよう。

(一)和歌は素朴なものから次第に複雑になったという考えは仮名序では明瞭でなく、真名序の「長歌・短歌・旋頭・混本ノ類、雑体一ニ非ズ、源流漸ク繁シ」という言に判然と現われている。これは未定形歌から種々の歌体が生じた

ことをいったものであるが、中国の『文選』序の一節にならって書かれたのである。中国では実際にさまざまな形式の詩文が時代とともに発達したのであるが、和歌は平安時代以後にはほとんど短歌ばかりとなり、また混本歌というようなものは最初から存在せず、想像上の産物といっても差支えないものである。仮名序にせよ、真名序にせよ、この条の和歌発達史観は中国思想の影響を受けた観念論的なものであった。

(二)万葉時代または奈良時代というものを理想的な時代とみている。しかし、人麻呂・赤人についての記述もあいまいで、すべて『万葉集』についての不正確な知識に立脚した説といわざるをえない。これは古今集時代の宮廷和歌の興隆、平安初期の中国風文化流行への反動が一種の古代憧憬思想となつて、万葉時代に観念的に憧れさせる結果から生じたものである。なお、三代集以後、平安末期までの和歌の復古といえは『古今集』に返ることであつた。また、古歌の研究については『万葉集』と『古今集』との研究がそれぞれ独自の意義をもっていたが、それについて後述べる機会があるであらう。

(三)『古今集』の撰者たちに先立って、六人の歌人(後世にはかれらを六歌仙と呼ぶ)が現われたが、それらの先駆者が出した時代を「近き代」と呼んでいる。その結果、「古え——近き代——今」という時代区分法が成立するのであるが、これも中国の文運三遷説になつたものであらう。しかし、この時代区分は後世の藤原公任・藤原定家らの和歌史観にも影響を与えたものであり、和歌史の認識の一つの形式の起源として注目すべきものである(注五)。

『古今集』序に関してもう一ついいたいののは、この序にみられる和歌の六義説についてである。しかし、ページ数の関係もあるので、ここで壬生忠岑の『和歌体十種』を考察した後で、双方を比較するという方法をとろう。

『和歌体十種』は和歌の体を十種類に分け、それぞれに五首ずつの例歌を掲げ、その後漢文の短い説明をつけたものである。これを本書の本論とすれば、本論の前に漢文の短い序文がある。序を信用すれば『古今集』の撰者の一